

すなわち砂丘地は、塩基置換容量がほとんどないため、下層への流亡は肥料の種類間に差が少なく、空中への脱窒の少ない燐硝安加里の肥効が高くなったものと思われる。

また砂丘土壌は緩しよう作用が少ないため、アンモニア系肥料を一時に多量施用した場合、アンモニアの障害が出るのではないか？という点についても検討を要しよう。

3. む す び

以上、北陸におけるそ菜栽培の大部分を占める水田作そ菜と砂丘地そ菜について、燐硝安加里施用試験の結果を述べたが、いずれも常識的には、燐硝安加里が不向きと考えられる土壌でありなが

ら、他の窒素形態の肥料や緩効性肥料よりも、はるかに高い肥効をあげており、燐硝安加里は、北陸のそ菜用肥料としても極めて適切な肥料と考えられる。

(第6表) 砂丘地のダイコンに対する肥料の種類 (昭45、福井農試)

項目 処理	総重	根重	根長	根径	上物歩合(本数)			a当り収量 (重量)
					根重 (400g)	根長 (30cm)	岐根率	
油 粕	640 g	398 g	34.6 cm	4.9 cm	49%	54%	32%	265.1 kg
鶏 糞	621	403	37.1	4.7	49	58	21	268.4
I B 化成	748	451	39.2	5.0	65	77	10	300.4
C D U 化成	790	482	42.0	5.1	75	79	5	321.0
A M 化成	735	425	38.4	5.0	63	71	13	283.1
燐硝安加里	841	526	42.4	5.2	82	75	10	350.3

品種 花知らず時無 播種期 4月15日 施肥法 元肥全量施肥 N32kg、P20kg、K28kg

昭和50年には、どうなる？

米を生産調整して、できるだけ転換しろという。しかし、昔から米ものは相談、ということが云われている。一体、転換作物の採算見通しはどのようなのか、これが問題だ。そこで

① 44年の数字は、農林省統計調査部「44年生産費調査」による。

② 50年の数字は、各作物とも価格を据置き、生産高、規模、資本装備について高度化されるとした場合。

③ また飼料作物については、生草価格を1kg当り3.5円と推定して試算。

という、3つの条件から割り出した各転換作物の昭和44年と50年の収益性をみると、大体次のようになると思われる。

① 大豆

	44年	50年
10 a 当り収量 (kg)	159	250
所得 (円)	6,134	9,659
1日当り労働報酬(円)	1,227	1,462

・50年の経営規模は3ha、小型機械体系

② てん菜

	44年	50年
10 a 当り収量 (kg)	3,924	4,000
所得 (円)	11,901	14,101
1日当り労働報酬(円)	1,610	2,608

・50年の経営規模は20ha、大型機械体系

③ 桑園

	44年	50年
10 a 当り収量 (kg)	100(上繭)	100
所得 (円)	60,048	58,989
1日当り労働報酬(円)	1,246	2,080

・50年の経営規模は1ha、小型機械体系

④ 飼料作物

	44年	50年
10 a 当り収量 (kg)	5,274	6,000
所得 (円)	9,422	11,515
1日当り労働報酬(円)	1,376	2,776

・50年の経営規模は20ha、大型機械体系

⑤ 麦(小麦, ビール麦)

	44年	50年
10 a 当り小麦	297	250
収量(kg) ビール麦	312	300
所得 (円)	8,472	5,360
1日当り労働報酬(円)	899	3,840

・50年の経営規模は20ha、大型機械体系

なお、44年の農林省統計調査部の「44年生産費調査」による米のデータは次のとおりである。

10 a 当り収量	484kg
所得	44,539円
1日当り労働報酬	2,441円